

チューリヒのトーンハレが 改装工を終えこけら落とし

1ページに収めるのが不可能なほど充実した今月のスイス音楽界を、簡単にしかレポートできないのは残念だが、まずは9月15日、4年の改装工を終えたトーンハレのこけら落としが行われた。チューリヒ市長、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団のトップ二人のスピーチ後、音楽監督のバウ・ヤルヴィ指揮トーンハレ管による、マラー「交響曲第3番」が始まると、改善された音響が体感できた。余分な残響が除かれ、透明感のある音がクリアに客席へ届く。トゥッティの、音程にズレのないユニゾンに包まれたときの至福感は胸に迫るものがある。とくにチェロは全楽器通してまるでソロのようにまとまり、弦楽アンサンブルを美しくノスタルジックに導いた。ヴィンケ・レームクルの温かいアルトとコンサートマスターのヴァイオリンのデュオも宝石のような美しさだった。チューリヒ・ジングアカデミーの女声合唱とチューリヒ児童合唱団も健闘し、総勢162名の演奏者と、それを讃える聴衆が一体となって、「音楽の神殿」への帰還を喜んだのだ。

その後に参加したブカレストのエネスコ音楽祭から戻ったP・ヤルヴィとトーンハレ管は、9月23日からの新オルガン披露演奏会もこなした。パーゼル交響楽団とモントルー&ヴェヴェ9月音楽祭との共同でリシャル・デユビュニオンに委嘱した《カプリスV チューリヒ風》は、モントルーのジャズ・フェスティバルに合いそな曲だ。各楽器の首席に与えられたソロは表情豊かで、世界初演とは思えない確信

の演奏だった。続いてパーゼル・オルガンフェスティバルと共にギヨーム・コネソンに委嘱した「レクイエム協奏曲」が、パーゼルでの世界初演に続いて披露された。弦の美しさとオルガンのドラマ性が対比する《キリエ》、映画の「007」のテーマソングを思わせる《怒りの日》、夢のなかのような《我らに平和を与えたままごの3部構成で秀



チューリヒ・トーンハレ管によるトーンハレのこけら落とし公演から ©Gaëtan Bally

クチン接種・罹患・陰性証明書導入で1万3000人が訪れた。R・シユトラウス《サロメ》のプレミエは、歌劇場前広場の大スクリーンで無料のライブ・ビューイングでも視聴できた。アンドレアス・ホモキ総裁の新演出は、月を模した印象的な舞台装置で、登場人物の行動が動機づけされていたのが興味深い。音楽的にも高いレヴェルで、シモーネ・ヤングが導く

オーケストラは、シユトラウスにありがちな混沌とした演奏ではなく、スッキリとまとまっているがゆえに、上等なサスペンス音楽としての効果を発揮した。歌手陣も実力派ぞろいだ。題名役のエレナ・ステイキナは声、歌唱力、容姿、演技、どれを取っても理想的なサロメだし、ヨカナンが重要な役割を担うこの演出は、コスタス・スモリギナスあつての成功だ。ナラポートのマウロ・ペーターは甘く、ヘロデ王のヴォルフガング・アブリンガー・シユベルハッケは明瞭なドイツ語の発音と美声が光り、ヘロディアスのミヒャエラ・シユスターは大きすぎる声を上手くまとめて、全員が適役だった。

舞台でのカーテンコール後に劇場のバルコニーにも登場した出演者たちを、広場中に沸いた歓声が出迎えた。

ルツェルン音楽祭(後半)

9月1日に聴いたキリル・ペトレンコ指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は、ウエーバー「オペロン」序曲」とシユベルト「交響曲第8番《サ・グレイト》」で共演する欲びに包まれ、細部まで磨

き抜かれた演奏は聴衆を魅了した。しかしその最上級の出来を上回る、今年最高の幸福感を得られたのが、3日に所見したヘンデル《バルテノーベ》演奏会形式だった。ウィリアム・クリスティとレザール・フロリサンに支えられた歌手たちはみな、声帯を自然に鳴らす技術を持っており、肩肘張らない高度な演奏に酔った3時間だった。

5日に聴いたフロレスのリサイタルは、前方でレポートしたザルツブルク音楽祭とは同じ曲目なので割愛する。ほか、ミルガ・グラジニーテティエーラ指揮ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団の「シユーマン・ツイクルス」は、バワフルな「交響曲第1番《春》」、「第2番」と、それに挟まれたミエチスワフ・ヴァインベルク「交響曲第2番」から「アダージョ」が印象的な共演だった。

11日のブダベスト・フェスティバルオーケストラ「リストの夕べ」は、スイスのブランドAKRISが今宵のためにデザインしたSFチックに青光りするワンピースと超ハイヒールを履いたユジャ・ワンが、その姿に負けない集中力でリスト「ピアノ協奏曲第1番」を弾ききった。彼女の自由さをしっかりと支えたイヴァン・フィツシャーと当楽団の実力も光り、アツチエレランドの自然なうまさとバリのサロンを思わせる軽さやエスプリに、東欧の重厚な響きも聴かせ、聴衆を熱狂させた。リスト《ファウスト交響曲》はグレートヒエンの部分が落ち着かず、清楚感に欠けたが、高いテンションを最後まで保ち、長いクレッシェンドで効果的に盛り上げた。後日、ミヒャエル・ヘフリガー音楽祭総裁に「ベスト公演」を尋ねられたとき、彼が言及したのはこの公演だった。